外 典

「外典」とは正統な聖書と認められていない書のことです。その中に「ニコデモ福音書」という面白い書があります。

　イエスは十字架上でなくなってから、冥府に行き始祖アダムとエヴァに会って話をしたり聖ヨハネに会うという話があります。

　洗礼者ヨハネは「イエスが来られる。彼にお会いしたら、みなで礼拝しなさい。地上で犯した罪を悔い改められる唯一の機会である」と冥府でも死者を説いています。

　一方死の支配者サタンが登場し冥府の王ハデスとやりとりをしています。
「生前彼はわしの仕事の邪魔をして、病を癒したり、せっかくの死者を言葉ひとつで生き返らせたりしたのだ。どうかイエスをここにと閉じこめておいてくれ」
それに対してハデスは
「死者を言葉ひとつでいきかえらせる者をどんな力で閉じ込められるというのだ。彼がここに入れば、今までの死者をのこらず連れさってしまうだろう。だから入れるわけにはいかん」と反論しています。

　イエスは天国への門を開いて死者たちをつれて冥府から出て行ってしまいます。最後の場面ではイエスとともに処刑され、イエスに救いを求めた盗賊が十字架をかついでやって来ます。（新約外典 ﾆｺﾃﾞﾓ福音書）

　この外典は４世紀ごろ完成されギリシャ語、ラテン語などに翻訳されています。
　サタンがこっけいな悪役として登場し、冥府の王ハデスにやりこめられる場面などは庶民にかなり人気があったようです。

　「外典」には他に「トマスによるイエスの幼児物語」があります。新約正典は、イエスの誕生から十二歳までの期間が空白となっていますが、この外典はその間の神の子の神童ぶりや奇跡などを描いています。
　イエスが過越しの祭りにエルサレムの神殿で学者たちと話をしていて、彼を見つけた母マリアに「私が父のところにいるのがわからなかったのですか」
と答える話はこの書の中に書かれています。

機会があれば、一読をお薦めします。
資料 自由国民社「世界の奇書」